

トツレフンパ育教

本日と争戦洲歐

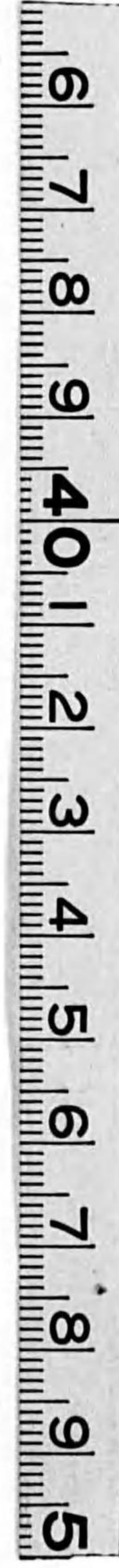
購入  
15.7.13  
帝國圖書館



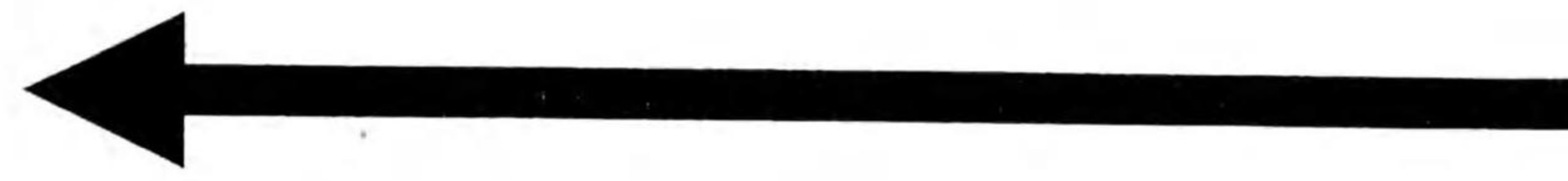
號日十月七

人法團財  
會協育教會社

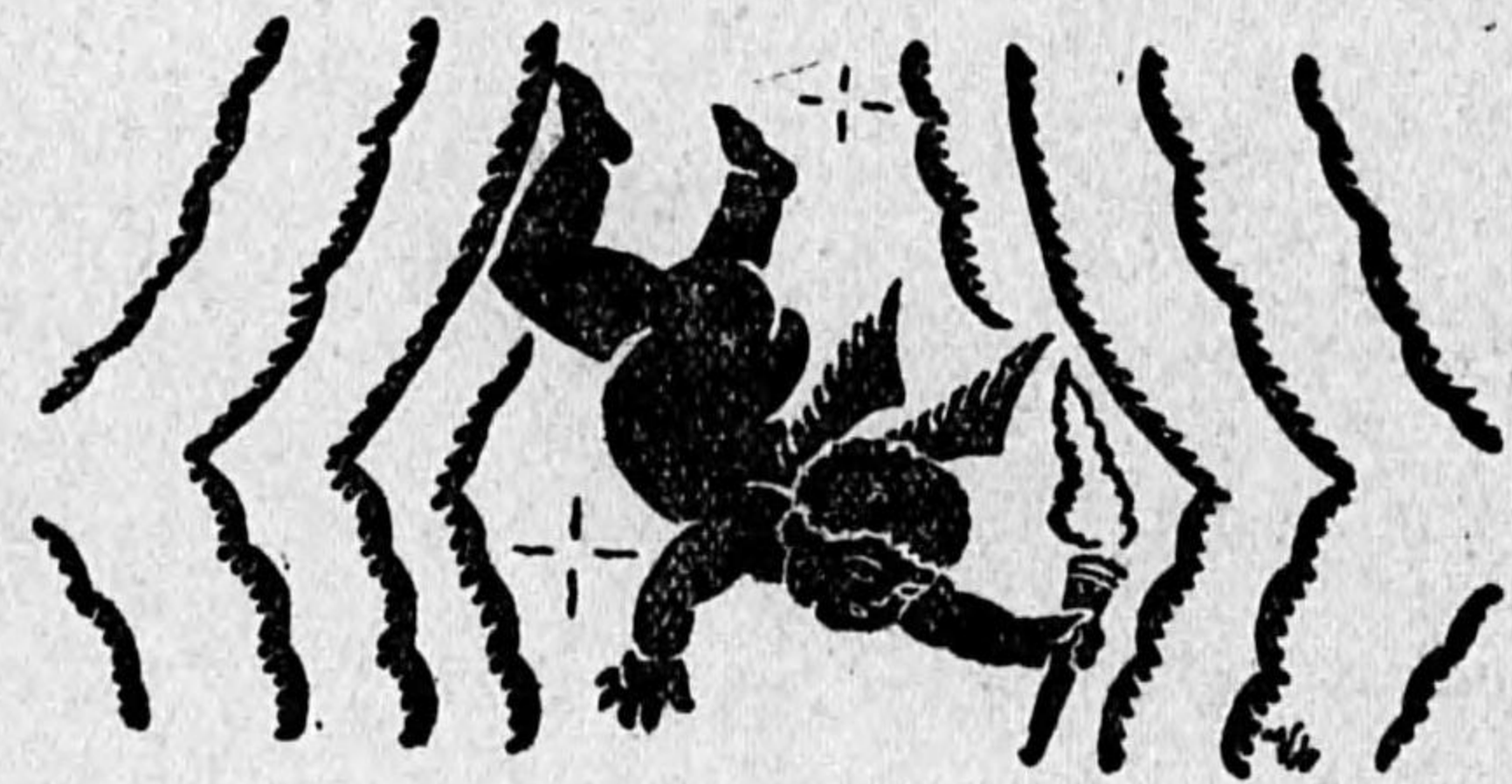
712



始



トツレフンパ育教



輯一十八百三第

人法團財  
會協育教會社

目次

歐洲戦争と日本……………市河彦太郎(一)

はしがき—獨ソ提携の根據—芬蘭進駐の實情—日本の進む道  
 (1個人主義と全體主義・2日本の特質・日本独自の立場)

印度の對日觀……………(三)

烟陸相の訓話……………(四)

日支の防空施設……………(五)

布哇支那人の動き……………(五)

編輯後記……………(六)

歐洲戦争と日本

外務省文化事業部 第二課 課長 市河彦太郎

はしがき

この頃は毎日毎日外務省の仕事が忙しうございまして家に歸るのが非常に遅くなる場合が多く、ひどいときは一年中で自分の家で晩の食事をすることが八度しかなかつたと云ふやうなこともございました。殆ど子供の顔を見ることもない位であります。それで一緒に食事をしながら子供と裕くり話をすることも減多にないのではいけないと思ひまして、毎朝、子供と一緒に起きて、朝飯だけはせめて家族のものと共にするやうに努めてをります。今朝も早く起きて卓子の上にあつた帝國大學新聞をひらいてみてをりますと非常に景氣の良いことが書いてあるのです。筆者の

名前は忘れましたが、今度の戦争には色々外部から窺ひ知れない事前の約束が出来上つて居るらしい。そしてその約束は大體次のやうなものらしい。即ちイタリアはアフリカを皆貰ふ筈になつてゐる。ドイツはスカンデナヴィヤを全部取つてしまふ。そればかりではなくバルカン方面にも進出することになつて居るらしい。日本は南洋方面の土地を取ることになつて居る。又ロシアは印度を取つてしまふと云ふのですが、どうもあまり景氣がよすぎる話ではは眉唾物ではないかなと思つてニヤ／＼笑ひながら読んで居りますと、二階に居た子供が下りて来て、パパ何を読んで居るのかと言ふものですから、實は是々だと言ひますと、それは少しインチキらしいと云ふのです。さうすると又上の女の子が二階から降りて來ましたから同じ話をしました所が、併しロシアが印度をすつかり取つてしまふと、北の方をあんなにたくさん持つてゐる上に又南の暖かい方を取つてしまふことになつて將來の日本にとつては大變だ。けれども印度には詰らない宗教がまだかなり残つてゐるらしいから、ロシアに一遍取らせて、宗教は阿片なりと云ふやうなことを言つて、一度すつかり綺麗に掃除してしまふのも良いでせうなどと言つて大笑ひを致しました。それから今日外務省に出まして、今朝斯う云ふ話があつたといふことを友人に話しました處、それは

非常に景氣の良い話だけでも、自分は今日來たフランスの雑誌を読んで居ると非常に景氣の悪い話がありました。それはいままではパリの街を貴婦人が犬を連れて歩くと落ちて居る骨には幾分まだ肉が付いて居て、犬が大喜びでそれを食べたものだが此の頃のパリには肉の付いて居る骨は少しも落ちて居ないから犬も喜んで骨を食べない。それは皆人間が骨までしやぶつてしまふからだと云ふやうなことが書いてあつたと云ふやうなことでした。そこで又大笑ひでした。

それから今度の戦争がどう云ふ風になるかといふことをよくきかれますが假令こんな風になるのぢやないかと云ふやうな豫想が出来ましたにしても、私は職責上餘りはつきり申上げられないので、非常に齒痒いやうな、申譯ないやうな氣がするのでございますけれども、はつきりした結論は申上げられないにしても大體現在どんな形勢に動きつゝあるかと云ふこと位は申上げられるのぢやないかと思ひますから、それをちよつと申上げませう。

### 獨ソ提携の根據

實は今度の戦争が始まります前、フィンランドとソ聯との間にゴタ／＼が起りました時に、私

がかつてフィンランドに居りました者として感じましたことは、是は單にフィンランドとロシアとの争と見るべきでなく、ロシア對スカンヂナビヤ及びフィンランドまで擴つて居る英國の勢力との争と見るべきだと感じたのでございます。と申しますのは、御承知の通りイギリスとロシアは歴史的に見てお互に利害關係が相容れない關係にある、即ちロシアが南の方に不凍港を求めようとして出ようとする、何時でも其處にはイギリスの領地、勢力範圍がありまして阻止されません。或時は東南の方に出まして、滿洲の方に出ました時には偶々日本の方の勢力と衝突となるので、日本をイギリスが支持すると云ふやうな譯で、何時でもイギリスとロシアは勢力が衝突し、利害が相反してゐるのでございます。そしてこんどのソ聯とフィンランドの争ひも結局はソ聯とフィンランドの背景をなすイギリスとの争ひ、云ひ換へればスカンヂナビヤにソ聯とイギリスが相互に勢力を伸張しやうとしてやつた争ひのやうに感じたのであります。

私は丁度三年程前フィンランドから歸つて参ります前迄約五年程住んで居りまして、色々フィンランドを中心として北歐の事情を調べました。御承知の通りこの前の歐洲戦争の始まる前にはフィンランドもエストニアもラトヴィアもリシアニアも皆ロシアの領地でありましたが、この

前の歐洲戦争の後皆獨立國になりました。そしてロシアの勢力は歐洲に於て失つた所が大きかつたのであります。其の下りました地位をロシアが何とかしてもう一度恢復して、東ヨーロッパの方に勢力を恢復しやうと云ふことを考へてゐたやうでした。

このロシアの西方への發展の勢力に對抗して、イギリスがガツチリ控へて居りまして、政治上の關係、商業上の關係、文化的の關係でスカンヂナビヤと密接な關係を結び北歐諸國がロシアの方に行かないやうな工作をやつてゐたのでございます。所が今度ロシアとフィンランドとの間に戦が始まりました。そしてこんどは今迄にない一つの要素が入つて來たのです。

それはドイツが御承知の通り此の前の戦争に負けまして、ヴェルサイユ條約に依つて非常な殘酷な取扱を受けて、あれだけの振興力のある國民が非常な不當な扱を受けたので、何とか元の地位に恢復し、中央ヨーロッパに於て一大發展勢力として立たうと云ふ状態が起りました。それがロシアと相反する又對抗するやうな状態にあつた間は丁度バランスが取れて居りまして、ロシアも餘り進出することが出来ない状態であつたのでございますが他方矢張り兩雄並び立つことの出來ない關係にあり、どうしてもドイツが復興する爲には現状を打破する、詰り國際的に土地の分

配とか、資源の分配の現状を變更することを求めるやうになり又之がどうしても現状維持を得とするイギリスに不利であると云ふ關係が生ずるのであります。目的から見ればロシアの方は極端な共産主義のやうな考でありますし、ドイツは同じ社會主義でも非常に穩健な、さうして又非常に民族主義的な色の濃い國でロシアとはそのまゝでは相互に相容れないやうな差があるのですが兩國とも少くとも世界の現状を打破したいと云ふ點に於ては全然一致するものですから、其の意味に於て非常に最近兩方の國が接近して來る形勢が見えました。

日本にはこの形勢をみてドイツは防共協定を忘れたのかと云ふやうな批難をする者もありませんけれども、ドイツにとつては固より防共協定も大切ですが、矢張り生きるか死ぬか云ふやうな時には、溺れる者は藁をも掴むと云ふ状態でロシアと手を握るやうになつたのではないかと思ひます。

### 芬蘭進駐の實情

そこでロシアとドイツが現状打破の勢力として結び着くと云ふことになりますと、非常にスカ

ンヂナビアの形勢が違つて參ります。殊にフィンランドは元々ロシアの勢力範囲でありましたから、この前の大戦のときも敵方のドイツの勢力を借りて獨立をはかると云ふことは變なことであつたのですけれども、獨立運動を起した時には敵方のドイツの力を借りて漸く獨立したやうな譯で、其の意味から言つても少くともフィンランドはドイツから非常な恩恵を蒙つて居りますが、扱て獨立して見ますと、フィンランドは人口が三百七十萬、東京市の半分位の人口しかない所に持つて來て、領土が日本全土（朝鮮をのぞく）位ありますから、將來人口が殖えて土地がせまくなりました躰ならばいざ知らず、現在の所では何よりも先づ平和、つまり現状維持的な氣持になつてしまふ。

さうなると、結局ロシアとドイツとはフィンランドの現状維持の氣分と非常に相反した考のグループとして兩方共氣持が互に離れてしまつたのであります。そこへ持つて來て、スウェーデン、ノルウェーとが、土地の割合、資源の割合に又人口が少いのですから、スカンヂナビア一帯は皆現状維持で、成るべくヴェルサイユ條約による現状を認めて、現状を變更するやうな變な運動には入りたくない。中立を守り、平和を守つて獨立を保持して行くやうな政策を採るやうにな

つて居りました。それですから其處が英國に取つては付け目で、現状維持を國是として居る國は皆自分の味方にしようと云ふので、御得意の外交でスウェーデン、ノルウェー、デンマーク、フィンランドを皆、味方につけて、現状不満のロシアやドイツには一大敵國を爲すやうなスターリング・ブロックと云ふやうな大きいブロックを作つて對抗してゐたのでありました。それですからフィンランドとロシアの争は單なる國境争ひと云ふやうなものではなく、矢張り世界の現状を變更した方が得であるか、其の儘の方が得であるかと云ふ二つの違つた考を持つたグループの國の争と私は感じたのであります。

丁度私がフィンランドに居りました時に、段々戦敗後のドイツの力が恢復して参りまして、其の國力恢復の勢が非常に激しかつたものですから、總ての國が「このまゝ行くと今度は飛んだことになるのぢやないか」と云ふやうに心配して、薄氣味悪く思つて参りました。所が丁度其の頃ストックホルム駐在のロンドン・タイムスの通信員が長い通信を書きまして、どうもドイツの勢力の復興は目醒しい。將來フィンランドとスウェーデンの間のオーランドと云ふ島をドイツが占領するやうなことでもあれば、スカンデナヴィアは完全にドイツに征服されてしまふかもしれない。

い。スウェーデンも首府を移して、イザとなつたらバルチック海を通らないでも自由に北海に行けるやうヨツテボリーに首府を移すことを考へる人も出て來たと云ふやうなことを書いたことがありました。そしてそんな状態の所に今度の戦争が勃發したのであります。イギリスとしては何とかして現状をそのまゝ維持して行きたいので、それに對して横紙破りのやうな行動をとる國の勢力は極力打破してしまはなければならぬ。それにはドイツがこの前の戦争のときと同じく資源に枯渴して、戦争を續けるにも石炭がない、石油がないと云ふやうにしなければならぬ。それには英帝國について廣大な植民地を持つて居るフランスを誘つて、北はスカンデナヴィアから南は印度、東の方は太平洋の方に迄互る海上封鎖を行つて、成るべくドイツには物資が行かないやうにして、それによつて勃興するドイツを押へようと云ふ戦術を取つたのであります。所が御承知の通りドイツは電撃作戦でノルウェーを押へてしまひましたから、英國は非常に驚きました。豫想することの出来なかつたやうな大きな變化が参りまして、一面イギリスは其の廣い領地と大きな勢力を以て、全世界に互る海上封鎖を斷行したとは云ひながら其の封鎖線の一くさりがくづれて非常に大きな穴が開いてしまつたやうな形勢になつて、今次戦争の性格を浮々決定してしまつ

たのでした。何故ならばこのためにノルウエーを中心として、イギリスの北海に於ける制海權を脅かし、フランス或はイギリスとアメリカの交通が潜水艦や飛行機で脅かされたり、或はもつと極端なことを考へますと、英本國をドイツが逆に封鎖するやうな形勢になり、そして植民地の方はどうやらやつてゆけても、本國それ自身がドイツの潜水艦と飛行機に依つて封鎖され、物資を運ぶ船は沈められ、あるひは英本土に獨逸が上陸すると云ふやうな由々敷大事にならないでもない云ふやう目下の重大形勢の素因を作つたからであります。これがヨーロッパ大戦の現状でございます。

## 日本の進む道

それでは其の間に處して日本はどう云ふ風に動くべきか、又どう云ふことをしなければならぬかと云ふことが非常に大きな問題として考へなければならぬことだと思ひますが、此の點に付きましては勿論日本政府は夙に正式に歐洲戰爭には不介入で、支那事變處理に専心邁進するのだと云ふはつきりした政策を發表して居りますから、私のやうに外務省で働いて居る者が其の政策

を批評したり、それに反抗するやうなことを申し上げたりすることは慎まなければならぬので、その點につきましてはあまりはつきりしたことは何も申し上げる自由がないのでございます。唯善いと悪いとに拘らず、今のやうな情勢のまゝ推移して行つた時に、どう云ふことが起つて來るであらうかと云ふ事實の豫想を少しばかり申上げることが差支ないと思ひますから、その方面のことを申述べて見ませう。

また今日はそれに關聯して日本の對外文化事業とか、對外文化宣傳についても少し御話申上げたいと思ひます。

實は先日私は文藝春秋社主催の座談會に出まして各方面の専門家のお集りの末席をけがしましたが、その際私は大學時代の同窓で、且外交問題の權威なる鹿島守之助博士の洞察にとんだ話を伺つたのであります。同博士はドイツが此の次にオランダの方に出るか或はバルカンの方に出るか云ふことは非常に面白い問題であるけれども、ドイツの最近の情勢から言へば、どうも自分はオランダの方に出て來るやうな氣がする。現在ドイツのことを判斷するのに非常に注意しなければならぬことは、政治の優越とでも言ひませうか、何か軍事上から言へばこちらが徳だとか



財政上から言へばこつちが損だとか云ふやうな意見が出て、結局はもつと大きな大乗的な政治的判斷と云ふやうなものから大きな政策が決定されて居ると云ふ點を注意して見なければならぬ。それがドイツの最近の動きの特長であると云ふことを言はれましたが、鹿島君は長い間外交官としてドイツに居られましたし、其の學位論文も「歐洲大戰の原因に關する研究」ですから、このさり氣なく云はれた言葉も非常に學問的に深い研究から生れて來た且又直觀にとんだ説だと思ふのです。鹿島君の言ふ所によれば、今ドイツの政策を決定して居る者はリツペントロツプである。其のリツペントロツプは大使としてイギリスに滞在して非常にイギリスを研究して居る。どうすればイギリスが困るか、どうすればイギリスが參るか云ふことを色々研究して居る。大體此の人の説に依つてヒットラーは總てをやつて居る。そのリツペントロツプの書いたものとか演説を見ると、どうしてもドイツはこの次オランダを衝くやうに思ふと言はれるのです。若しもドイツがオランダを占領し、あすここに潜水艦の根據地を作り、飛行機を飛ばすと、結局アメリカ參戰と云ふやうなことになつて、將來飛んでもないことになるのではないかと聞きました所ドイツはその前にオランダから毎日空襲々々で英國全土を灰燼に歸してしまふやうな戦法を取るのではない

かと思ふと言ひました。私がこの説に賛成するかしないかはちよつと申上げられませぬが、兎に角非常に面白い見方であると思ひます。是は今後新聞を読んで居りまして、當るか當らぬか、當るも八卦當らぬも八卦で私としては何とも申上げられませぬ。併し唯さう云ふやうなことになつた時に日本はどう云ふ態度を取るかと云ふ問題が起つてまゐりませう。現在は不介入と云ふことになつて居りますし、此の間有田外務大臣も太平洋方面は現状維持である、若しも之を變更するやうな者があれば日本はそれについて重大なる關心を持つと云ふやうな意味のことを非常に外交的な非常に婉曲な、しかし含蓄ある言葉で表現されましたから、私共が重ねてそれについて自己の意見を申上げるべきではないと思ひますので差控えておきます。

兎に角私共の考へられますことは、ドイツがオランダに侵入すると云ふことが將來あるとしてアメリカが英佛側に入つて參戰する場合オランダの東印度、つまりジャバ、スマトラ、ボルネオ、セレベスと云ふやうな所を、誰が占領するか又は管理するか、といふ重大問題が持上つてくる場合もあり得ると思ふのであります。そんなときに日本は黙つて指を衝へて見て居るか、或は何等の行動を起すかと云ふこと、これこそ私共の今後考へて置かなければならぬ點ではないかと思

ひます。これ以上申上げると少し言ひ過ぎになるかと思ひますから申上げられませぬが、兎に角日本が好むと好まざるとに拘らず、豫想しないやうな大きな嵐の中に捲込まれると云ふやうなことが起り得るのではないかと思ひます。さうすると不介入とか、支那事變處理中心とか言つても結局ヅル／＼引摺られて違つた方面に行く危険は多分にあるのではないかと思ふのであります。

### (1) 個人主義と全體主義

以上のやうな状態の下にあつて日本としては現状打破のグループに入らなければならぬとか現状維持の方に入るべきであるとかいふ／＼の意見がありますがこれはなかなか難問題であります。私は勿論世界の現状が完全で満足なものでないと云ふ點に於ていつも進歩と公平を求めて現状を打破しなければならぬと思ふ者の一人でございますけれども、日本が將來大きな世界の動亂に捲込まれる危険を前にして、將來の究極の理想を明確に把握することなしに漫然とあるひは現状維持國と行動を共にしたり、又は現状打破國に加擔したり、ふら／＼とその日暮しの考でやつて行くべきではなく、日本は日本で一つの独自の考で以て身を處して行かなければならぬのでは

ないかと思ふのでございます。

其の點に於て或は皆様の賛成を得ませぬかも知れませぬし、或は又多くの日本人と違つた考を申述べるやうに御思ひになるかも知れませぬが、私は何か此の混亂の世界に於て、日本の究極に於て求むべきことは單なる英國反對の運動でもなければドイツの味方をする運動でもなく、もし便宜上一時之等と行動を共にすることがあるとしても、それはその高き理想の實現の道程に於て一時的、方便的に乃至手段的に又は過程的にその段階を経てゆく必要があるといふに留ると思ふのであります。現在一方英佛米を中心にした個人を中心にして生活を考へて行かうとする人生觀に對立するものとしてドイツ、イタリアの如く社會全體とか集團を中心にしてものを考へて行かうと云ふ考が對立して居ります。ロシアも矢張り全體主義、集團主義の國と言つても宜いと思ひますが、さう云ふ新しい考が、丁度封建時代の次に資本主義時代が來たやうに「後から生れて來たもの」として先行の個人主義を根底とした英佛米の民主主義に代らんとしていま激しい闘争が起つてゐると見てよいのではないかと思はれます。ドイツやイタリアとしてはこの全體主義が「後から生れて來たもの」として當然古ぼけた民主主義に代つて新しい時代を受繼いでゆくもの

であると主張してゐる譯です。

つまり相争つてゐる國々は皆、自分達の主張してゐる主義こそ文明生活に缺くべからざる生活の原理であるといふやうに主張してゐるのです。古い民主主義の文明と新しい全體主義の文明の鬭争それが今度の歐洲戦争の意義であるとも見られるのであります。今度の戦争が起りまして後各國の政治家は皆演説をする度毎に我々の考の方が正しいから是の爲に戦ふのだと云ふやうなことを自國の國民及世界の民衆に印象づけようと努力してゐるのであります。

丁度私が今から十年程前にアメリカに居りました時も、其の頃はアメリカが好景氣の絶頂でございまして、まだ一九二九年の不景氣が來てアメリカに經濟的混亂がくる前でしたが、或人がその富有の絶頂にあるアメリカについて一冊の本を書きました。そして「此の好景氣のアメリカにも非常に暗い一つの影が射して居る。それはロシアの影である。こちらは民主主義とか、經濟上の自由主義と云ふ考へで非常にうまくやつて居るやうに考へてゐるけれども、聽ては其の考が間違であるときがくるぞと警告されてゐるやうなものだ。君達が贅澤して、それを個人主義とか民主主義のお蔭だ位に思つて居るけれども、自分の國の黒ん坊に民主主義を實行してをらぬ

ではないか。又政治的に平等であると言つても、有り餘つてゐる土地を持ち、贅澤な物を食べてゐる者があると同時に一方には千萬人からの失業者が居るではないかといふやうなことを言つてロシアは挑戦して來てゐる」と書いて居りました。それがロシアがアメリカに投げかけてゐる暗い影であるといふのです。ロシアは個人を中心とした考に反對して社會全體の幸福とか、それを全體的に高めるといふことを政治的目標としてゐる。つまり胡麻化しの政治的民主主義でなく、本當の意味の民主主義、つまり經濟上の民主主義を主張してアメリカの考へ方に對立してゐるのであるとその人は書いて居りました。それならば、こんどの世界大戦は果して眞に個人主義對全體主義の鬭争であるか？ 兩者は眞に絶対に相容れない立場を持つてゐるのか？ 時代の流れは一切の個人主義的なるものを押し流しその後全體主義的なるものを持來す丈であるのか？ 勿論大雜把に言つてしまふならば、傾向として大體將來は所謂個人主義的なるものが揚棄され所謂全體主義的なるものが中心となり、従つて戦後に於ては日本にも内閣制度、行政組織、議會制度を初め社會全般に互つて餘程全體主義的色彩の強いものが現れてくるだらうとは思ひますが、この問題については、日本人としてももう少し深く掘り下げて考へてみる必要があるのではないかと思

ひます。元來個人主義と申しましても、銘々が物質的に於ても精神的に於ても立派な生活をして  
 銘々がそれに満足しこれを謳歌するやうになる爲には、極少數の人丈が満足してゐればよいとい  
 るのではなく、總ての人の生活を保證するやうなものがなければならぬ。従つてそれは理想に  
 於ては殆ど全體主義と何も違はないことになつて來るではないかと思ふのであります。例へば個  
 人主義の理想から云つても、一人の個人が非常に立派な個人である爲には、一切の私慾のもの  
 は捨てて、自分の利益は即ち國家乃至社會全體の利益に一致すると云ふ所まで昇つて行かねばな  
 らないでせう。そこ迄行くことが個人主義の最高理想と云ふことになりますと、全體主義と殆ど  
 變らないものになつてしまふと云ふことになりはしないか。又全體主義とか集團主義とか申しま  
 しても、結局は全體をよくする爲には、全體としては宜いけれども、皆中に居る個人はみじめで  
 あると云ふことは許されないし又それでは全體の幸福とは言へないと思ひます。個人のみじめ  
 ある人が幾ら集つてもその全體が幸福にはなれないと思ひます。従つて全體主義が全部をよいも  
 のであらしめる爲には、その内に在る者一人々々の物質的・精神的の幸福が最高度に發揮されたも  
 のでなければならぬ。さうすると個人主義と全體主義とはその究極に於ては一致したものと考  
 へてもよいのではないか？つまり個人主義乃至民主主義と全體主義乃至集團主義とは、深く掘り  
 下げて考へて行けば一致する理想を持つてゐながら單に政策的に又は方便的に現在の自己の利益  
 を追求するに便利なスローガンとして、究極の理想を實現する爲の派生的なる手段の差異を誇張  
 して對立させてゐるに過ぎないものと見るのがより眞實に近い見方ではないでせうか？

## (2) 日本 の 特 質

それでは日本が、一方に於て兩ヨーロッパの民主主義、殊に第一次歐洲大戰以後その西ヨー  
 ヴパの文明の後繼者のやうな顔をして控へてゐるアメリカの民主主義と又他方に於てそんな考は  
 間違つてゐる、それを打倒するのが我々の使命であると主張して嚴然と立ち上つたロシアとかド  
 イツ、イタリヤの全體主義の二つに挟まれてどちらに旗を上げべきやといふ課題を課せられてゐ  
 るやうに思ひます。其の間に處して我々は何を主張すべきか。此の全體主義と個人主義の間に挟  
 つて、何を求め、何を主張すべきでありませうか？古くから日本はよく外國人に依つて古代の  
 ギリシヤに譬へられて居ります。私は歴史の専門家ではありませぬから、ギリシヤの歴史に付て

は偉さうなことは申上げられませぬけれども、私の諒解してゐることが若しも間違ないならば、ヨーロッパの文明に於てギリシヤの時代が始めて個人の尊嚴を認めた時代であると見てよいのではないかと思ひます。その後中世紀に於ては宗教的の全體主義の時代ともいふべき時代がつゞき、近世の初頭文藝復興時代以後又再び個人を中心として考へてゆく時代がつゞいてゐると見てよいのではないかと思ひます。日本をギリシヤに比較した人はたくさんありますが、その一人は小泉八雲です。彼は、日本が非常に個人主義的、最も良い意味に於ける個人主義的色彩をもつてゐて、美術品を見ても非常に「キメ」の濃やかな、個人個人が優れてを一つ、その天分を磨き上げて居なければ出来ないやうな美術品や文學を拵へて居る國だと見たのです。私もイギリスに居りました時に、大英博物館で昔のギリシヤの美術工藝品の陳列を見まして、随分日本に似たものがあるな、成る程日本がギリシヤに比べられるのも故ある哉と思つたことがありました。何故日本とギリシヤがそんなに似てゐるかといふと、大體土地柄が非常に似て居ります。日本は太平洋の島から成り立つて居る。ギリシヤは地中海に突出した半島と島から成り立つて、氣候が温暖で人情も濃やかで温かい。それから見渡す限り廣いけれど非常に單調な支那印度の土地と違ひまして

日本の方は太平洋の岸に近く偏在して居る島々でございますから、非常に雨も霧も多いし、風や氣候の變化がまことに細かい。廣重を評した或外國の美術家は、霧と雨と雪の國の藝術家だといふやうなことを申しました。我々は日本を月雪花の國と思つてゐますが外國人は霧と雨と雪の國だと言つて居る譯です。日本は秋になると何百種と云ふ色彩のことなつた紅葉が見られる。又土地が南北に擴つて居りますから産物も多いし、魚の種類も多い。此の點日本程個々別々のあらゆる種類の細かいものに恵まれて居る國はない。

一寸話が横道にそれますが一つ面白い例を申上ます。札幌の帝大の先生で中谷宇吉郎と云ふ先生が雪の研究について本を御出しになりましたがその本をみると面白いことが書いてある。なぜ中谷先生が雪の研究を始められたかといふと、日本程雪害に悩む國はない。それなのに雪を研究した學者といふものが殆どない。たつた一人、昔大鹽平八郎が亂を起した時に大阪に在任してこの亂を抑へた土井といふ大名が雪を研究して、可なり詳しい論文を發表してゐるけれども、其の以外にない。日本程雪害に悩まされながら、又その研究を等閑にふしてゐる國はないといふので研究を始められたさうです。尤も研究して見ると、アメリカの或る學者が雪を顯微鏡で見た所が

あまりその結晶が美しいので子供のときから一生かかつて雪の研究をして、雪の各種の型の結晶を八千位顕微鏡寫眞に撮つてそれを發表した人があることがわかつたさうですが、このアメリカの學者がそれ丈あつめるのに一生掛つた程なのに中谷先生がそれを日本の雪で結晶の種類を集めてみると、それと同じ位の数がたつた二年で集つたといふことです。アメリカでは一生かゝつてやつと集る位なのに日本では二年でそれ丈集めることが出来たといふことが、そもそも日本が雪の種類に於てもいかに豊富であるかといふことを表してゐると思ふのです。

土地は南北にひろくのび、種々の氣候と土地に恵まれてゐますので、そこに住んでゐる人々の氣質も顔も色々變つてゐる。將棋の好きな者もあれば碁の好きな者もあり、釣の好きな者も居るといふ譯で、單に趣味から見ても色々變つてゐる。好みも種々雑多である。單調の反對です。ですから此の人達が議論をするとき々の意見が出て、皆各々が一言居士になつたりお山の大将になつて意見を立てるから纏らない。日本程文句の多い國はない。だから議會なんか皆行く行かないで纏らないといふことも道理だと云ふことになつてくる。所がいざ戦争となると上御一人の御統率下に一體にまとまつてしまふ。日本全體が完全に一つの團體に纏つてしまつて、一人も不平を

言ふ者も出て來ない。

日本人が一面に於て個性を尊重する國民でありながら又他面團體行動にもすぐれてゐる例は日本の家族主義の中にも現はれてゐると思ふ。銘々が一家の中で自分の我儘を通して個人主義を發揮するには餘りにも家族全體を愛し過ぎてゐる爲に、或る場合喜んで自分自身を犠牲にするといふ行き方がそれです。貧しい家で母なる人が自分が食べるものがなくても子供がおいしいものを喰べて喜ぶ顔を見る方がうれしいと思つて我慢する。家族の人の喜びのために自ら進んで快く犠牲になるといふ考へ方です。國全體のことを考へて自ら進んで戦場に露と消えて、恨みとも悲しみともしない。この自分自身を全體の爲に投げ出すと云ふ氣持、それがまた日本の一つの偉大なる特長ではないかと思ひます。

かくの如く一面に於て日本人が非常に個性を尊ぶと同時に、一面に於て非常に團體的な所があつた。全體主義と個人主義の間を何のこだはりもなく自由自在に動いて行くことが出来ると云ふことが日本の特長ではないかと思ひます。

實は私はさう云ふやうなことを思ひだして、日本の過去の文學の歴史などを辿つて見ましても

矢張り同じことを發見することが出来ると思ふのであります。只今ここに持つてまわりましたけれども、餘り讀むので表紙などビリ／＼になつて居りますが、東北帝大の英文學を教へてゐられる土居光知先生の「文學論」といふ本でござりますが、此の先生は英文ばかりでなく、日本文學も研究して居られます。即ち、從來の日本で外國文學を研究する人は、大體外國文學のみを研究して居りましたが、土居先生は我々がなぜ外國文學を研究しなければならないかと云ふと、それは矢張り終局に於て日本文學をより豊かにする爲にやるべきであるから、日本人でありながら外國文學だけを研究してゐるのは意味がないといふ考を持つて、深く日本文學も研究して、独自の眼光を以て日本文學を讀んでこれに卓越した一つの系統をあたへ分類をされてゐるのです。先生の考へによりますと、日本の文學は四つの時期に分れてゐる。第一は原始時代と申しますかそれは氏族制度の時代であつて、それは大體大化の改新時代迄を一くぎりとするべきであるといふのです。其の時代はどう云ふ時代であるかと云ふと、民族が個人を律する民族全體主義時代である。それから其の次は王朝時代、それが大體大化の新政から建久三年鎌倉幕府の開設迄、此の時代のことを貴族的個人主義の時代と名付けて居ります。詰り全體主義の反動として貴族的個人主義の

王朝時代が來た。それが行過ぎて枕草紙、源氏物語等にも現はれてゐるやうに、京都の人は贅澤三昧をして個人主義の最高峰に上り詰めて居りながら、地方の人々は食物にも事を缺くといふ憐れな生活に陥り、其の反動として起つた幕府の開設から明治の元年が封建時代といふ、主從關係に依る集團主義の時代に移つたと見るべきだと先生は言つて居ります。最後の立憲時代といふのは明治大正の個人主義的經濟の時代つまり資本主義時代を指して名付けたものです。

土居先生はさうに分類して過去の日本の文學、思想の變遷と云ふものを非常に明瞭に系統付けられたので、これは大變面白いと云ふよりも立派な御研究だと思つて敬服してゐるのでございますが、私が申上げたいのはしからば此の次にはいかなる時代が來るかといふことです。既に皆さんの御承知の通り現在は統制經濟の時代といはれて居ります。砂糖やマッチの切符制度の採用となり或は政府で皮革の統制をするといふやうに、我々の政治經濟、行く行くは雜誌の統制とか新聞の統制とか、言論の統制とか一般の文化の統制にまでゆくやうな傾向さへ現れて居ります。矢張り大體に於いてそれは集團主義の時代、全體主義の方に傾かんとしてゐる運動が始つてゐると見るべきはないかと思ふのでござります。

## (3) 日本独自の立場

それならば日本は今全體主義の方に行かうとして居るのだから、日本の今後の進路の目標は全體主義にあるのかと早合點なさる方があるかも知れませんが、私は此點を明確にから云ひ度いのです。歴史の流れとして現下の状態は全體主義の方に流れてゐることは事實であるが、あくまでも我々のはつきり知つておくべきことは全體主義的政策をとるとしてもそれは結局究極の理想として採るのではなく、時の必要によつて、その時代を過程として過ぎゆくにすぎない。究極の理想は個人主義でも全體主義でもない。理想としてとるべきはその兩者のいつれにも傾かずして、しかもその時の必要に應じてそのいつれをも採入れてゆける立場に立つことだと思ひます。

それならばどんなときに個人主義的色彩が強くなるのかと全體主義的色彩が強くなるのかと申しますと是は一軒の家でも同じであります、家の貧しいとき銘々がやりたい放題のことをやれば、其の家や國はめちやめちやになる。生活の苦しい時、經濟的に逼迫した時代、例へば原始時代または生産分配が充分でなく經濟的に苦しい時代にはどうしても個人の自由を制限して全體

主義的になる。是は今のやうな物の足りない時はどうしても全體主義になる傾向があると云へると思ひます。さう云ふ時代には銘々の自由を認めることは出来ない。若しそんな時代に各人の自由を認めれば社會全體の統制が亂れてしまふ。一軒の家でも初代の人は質素なことをして資産を起したけれども、孫子の時代にはやや樂になつて、直接物の生産や分配に従事しないで、笛も習ひたい、繪も習ひたいといふやうな要求も認められ銘々の自由も許すと云ふやうになる。物の足りない時にはそれ所ではないが、丁度船が引つ繰り返りさうな時には乗組員が呑氣に笛なんか吹いてはゐられない。全部の人がオールや舵にかじりついて協力一致、全體が溺れない算段をしなければならぬ。しかし物の豊かな時がくれば「息子も何々先生について繪を習つて居ります」などと自慢してそれから一錢も利益が入らなくても喜んで居る親父さんも出てくると云ふやうな譯です。この立場に立つて各國興亡の歴史の跡をみると面白い。一つの國が創始時代の苦しい時代を脱却してやうやく物の豊富な時代に入り、個人の自由もみとめ、藝術の花も咲き、文化も進んで來たとき、餘程氣をつけないと、その個人主義の花が咲きつばなしになつて散つてしまふとその國は亡びるやうになつてゆくのではないか？



一つの文明が個人主義的色彩がよくなつたときは又一面警戒を要するときで、それを又ひきしめて自由に全體主義的の方にもどれるやうにしないと危険ではないか。同時に又全體主義の方に行きつばなしで個人主義的の方に自由に戻つてくる丈のフレキシビリティを失つてしまふもの危険であると思ふのであります。即ちその中の一つに固定したりその一つを究極の理想と考へるの危険でその兩者を超えたあるものためにその二つのものを自由に使つてゆくといふ立場をとるべきだと思ひます。日本は氏族制度時代をすぎ、王朝時代の個人主義の時代に到達し又是が行過ぎると鎌倉時代が始まつて、統制によつて引締めて、力強い中央集権の時代になつて、又やや樂になつたとき明治時代の個人主義の時代となり、又それが少し行過ぎると統制によつて個人の自由を押へるやうな時代に代つてまゐりました。かくして日本は常に全體主義にも行ききりとならず、個人主義にも固定せず、必要に応じて手綱を引締めたり緩めたりしてゐる。それが日本の強みではないかと思ひます。

結論を申しますと、結局我々がなぜこんな古い歴史を持ちながら今尙若い新しい國として生きて行けるかといふことは、全體主義の方にも、個人主義の方にも行ききりとならず何時でも自

由自在に兩方の間を縫つて兩方の良い所を調和して行くことが出来たからではないか。丁度手に例へれば、掌が一つの中心で、それから五本の指が出る。それがもし極端に個人主義的となり人差指と親指とがお互に知らぬと言つて夫々に勝手なことをしてゐるとします。所が實際、人差指に何かの毒でも入れればすぐ親指も影響がある。親指は親指、人差指は人差指で使ひ道は違ふけれども、同時に共通なる掌がある。共通なるものがあつてしかも差別的なるものがあるといふのが生命の本然の姿ではないかと思ふのです。もし共通的なるもののみを中心としてゆくと、スキーマの手袋のやうに掌だけで、指の自由がなくて動きが取れなくなる。差別があるが同時にそこに基定的のもので共通に結びつけられてゐる。違ふけれども一つである。それが生命の姿である。

究極に於て求めらるべきは個人主義でも全體主義でもない。そのいづれにもかたむかず、いづれをも容れてゆく立場によつてのみ生命が生き生きと伸展して行くのではないかと思ひます。

もし我々日本人が對外文化宣傳を行ふならば此の考——即ち個人主義と全體主義の絶對辨證法的統一の立場を取らなければならぬのではないかと思ひます。この點に於て最近岩波新書の一冊として出た西田幾多郎先生の「日本文化の問題」の中にも日本文化の特質について同じやうな

ことが書いてあつたので私は大變嬉しく思ひました。私は學生時代から西田幾多郎先生の御本には非常に御世話になりました。此の全體主義、個人主義の絶対辨證法的統一といふことを主張する立場に依つて、民主主義、全體主義の上に立ち日本の自主外交の哲學的背景を進むことが出来る。若し對外文化事業を日本が行ふならば、此の世界觀を世界に擴めることに依つて、人を欺かず、人を搾取せず、眞の自由なき胡麻化しの自由主義、資本專制の民主主義の誤りに陥らず又全體主義に行きすぎて自縛自縛にも陥ることもなく自由無碍なる境地に立つて進んでゆけることと思ひます。もし今次の戦争が獨逸側の勝利に歸した時はおそらく世界は全體主義的色彩の強い高度の國防國家的體制に向つて進んでゆき、この時代が又長くつゞくことと思ひますが、それは歴史の進展上寧ろ自然の流れに沿うたものとしてそれを受け入れると同時に、全體主義も亦個人主義と共に究極の理想としては採るべきものではない點を忘れず、しかも時の必要に應じ、全體主義からとるべきものは充分とつてゆくといふ立場をとるべきだと思ひます。

一番大切な對外文化宣傳實際の狀況の説明が簡單になりましたが是で終ります。

—一九四〇・五・七—

## 支那事變前後の

### 印度の對日觀

支那のデマ宣傳で悪化

### 勃發直後の動き

事變勃發以來、印度の諸新聞は支那のデマ放送による記事を掲載しはじめた。戦端開始の第一報も「日支兩國は戦争を開始したが、支那軍は日本軍に對して目下反撃中である」といふやうな書き方で、開戦の理由は「一句もない。それから毎日のやうに日本軍の連戦連敗のニュースが紙面を飾つた。然しかかるデマ記事も我皇軍

の破竹の進撃の前には何等效力がなかつた。天津が間もなく我が手に入り、八月には關東軍が長城線を完全に占領してしまひ、地方に於ては治安維持會まで出来るやうな状態になると、さすがの支那も敗戦の事實を枉げることが出来なくなつた。そこで今度は方法を變へて、日本非難の記事を供給する一方、ロイターのニュースは針小棒大の記事を掲げて散々日本非難の宣傳を始めた。

印度の諸新聞はこれ等のニュースを得ると、道を歩いてゐる人にでも解る大きな字で「ジャップス・ユーズ・ポイズン・ガス」といふやうな見出しを掲げて、壯に反日的記事を掲載した例へば日本軍は毒ガスを使用してゐるとか、ダムダム弾を用ひてゐるとか、戦闘機や爆撃機に

よつて、共同租界や文化施設の大學や中小學校や病院等の非武装地帯を壯に爆撃してゐるといふやうな記事を盛に書き立てた。

元來、印度は「宗教によつて興り宗教によつて滅ぶ」と言はれてゐるやうに印度人は全く宗教を基調として生活してゐる。従つて平和を愛好することが強くて、以上のやうな記事を見ると、非常に憤慨して、日本に對する輿論は刻々と悪化して行つた。そして遂に「支那を日本の魔手より救へ」といふやうな言葉が現はれるに至つた。

然るに日本側のニュースは事變勃發以來、一度も紙上に現れない。我國政府の聲明も、戦況ニュースも全然掲載されない始末である。支那のデマニュースに一方的に蹂躪されて、對日悪

化はつるばかりであつた。

この間にあつて印度の對日觀是正に努力したのは在印の邦人であつたが、これも決して順調には行かなかつた。例へば昭和十二年九月一日にわが外務省で在京外國記者團を招待して發表した最初の支那事變に對する聲明を掲載した大阪朝日新聞を同十月一日に入手した我國の一留學生が、對日悪化是正のいい記事であるとして直ちに英譯して印度の新聞にかかげた。この時でも、記事は四つの新聞社に送られたが、三社は掲載を拒絶し、一社のみが、それも重要な箇所はカットして掲載したのであつた。それでもこの記事が印度に於ける日本政府の最初の記事であつた。即ち印度の著名な新聞は悉く支那のデマのニュース・ヴァリユーを認めて採用する

ので、在印邦人がそれ等のニュースを覆へすやうな記事を持つて行つても、新聞社は體面上それを採用しない。かゝる状況であつたから日本から記事を送つても印度の新聞社は、それを掲載せず、全く支那のデマ放送に壓倒されてしまつたのである。

### 支那の悪辣な宣傳

支那が如何に悪辣な宣傳をしてゐるかの實例の一つにこんながある。

昭和十三年七月に漢口政府の使者數名が近東回教徒親善使節の名目で印度を講演して廻つた然るにこの使節一行は、回教徒親善といふのは表面だけで、印度に排日氣勢を煽るために來たのであつた。それで各地で日本を誹謗する講演

をやつた。その要旨は次のやうな愚劣極まるものであつた。

「支那は過去千數百年の間に日本を文化的に育て上げ、やつと過去五十年間に日本が一人前になつたと思つたら、今度はその恩を仇で返して支那を武力で併呑せんとしてゐる。しかも支那軍は日本と同等以上の武器を備へてをり實力もあるが、支那は平和を愛する國民であるから、戦争の擴大することを恐れて、なるだけ爆弾を使はないやうにしてゐる。然るに日本軍は飛行機を支那へ壯んに飛ばし、大きな爆弾を投下して非戦闘員まで殺戮してゐる。支那の飛行機も東京に飛んでは行つたが、爆弾の代りに非人道的な戦争は早く止めたらどうかといふ宣傳ビラを撒いて歸つて來た。」

こんな調子の全く憤慨に價する講演をなしたのである。その圖々しさには驚くの外はないがこれが支那の手である。そして最後には「どうか支那を助けてくれ。然し直ちに支那に兵隊を送つてくれとか、義勇軍を派遣してくれといふのではない。日本は経済的に必ず破れるから、その破綻を一日でも早めるために日本品の排斥を今日からやつてくれ。これが支那を助ける唯一の道である。」

と壇上でうまく涙流して頼んだ。

この影響かどうかは知らぬが、その直後、ボンベイでは日本品の排斥運動が起り、また印度から支那に醫者や看護婦即ち醫療班が派遣された事實がある。

實にとるに足らぬデマ宣傳であるが、しかし

その効果は見逃すわけにはゆかぬ。以上のやうな虚構な支那のデマ宣傳によつて、印度人の大半は排日的になり、事態は日本に不利になつて行つたのである。

### 英國の監視

然し以上の如き印度の對日觀を悪化せしめた裏面には英國の手が大きく動いてゐることを觀過してはならない。支那政府の逆宣傳を巧に利用して、例へばロイター通信社の如きは、それに輪をかけた針小棒大の排日記事を送り、壯んに日本を非人道呼ばりし、日本の軍事行動を侵略的帝國主義とまで極言し、更に、日本が支那を併呑したら、必ず印度へその魔手を伸ばすに相違ないが、その時はお前達はどんな目にあふ

か、英國は印度人をその悲劇から救ふためにシンガポールの要塞を固め、印度に飛行場を増設して、日本の野望から印度を守らんとしてゐるのだ、と述べて印度人の感情を刺戟した。また人形に軍服を着せて、支那の兵隊が銃劍術の練習してゐる寫眞を撮つて、日本兵はかやうに支那兵の死骸を持つて来て銃劍術の稽古をしてゐると書いたり、鐵道線路の上に赤ん坊を泣かせておいて、日本軍の空爆のため親は殺され赤ん坊一人がこのやうに淋しく泣いてゐるといふ如き悪辣なデマ宣傳をなした。また、支那の臨時維新兩政府の成立の記事は全然送らず、たゞ蔣介石政權の強力なことを強調すると共に、日本の經濟力は非常に薄弱で近い内に必ず經濟的に參つてしまふと宣傳した。

かやうに日本が不利なるやうなことを盛んに宣傳して、印度人の心ある者、又は親日的傾向のある印度人を英國になつくやうにしむけた。かゝる状態であるから、印度人はすつかり排日的になり、日本のことをいろいろ心配してゐる親日的な印度人も、英國の眼を恐れて、思ひきつた親日的な態度がとれず、拱手傍觀する有様であつた。

英國が印度を如何に抑壓してゐるかは論ずる迄もないが、日支事變勃發後は特に著るしく、印度人の自由を奪ひ、事變に關する日本の正しい立場の宣傳は全然許さない。在印邦人の活動も嚴重に監視して事變についての發言は程んど禁じたのであつた。

## 事變前の對日觀

かくして事態はますます憂慮すべき状態になつて行つた。しかし一方總領事館や、大會社あたりから我國の政府から發行されたパンフレツトが印度各地に配布され始められ、また親日的な印度人や、事變後渡日した印度人等を招待して日本の眞意を傳へる會なども、ぼつぼつ開かれて、英國の監視の下で不自由ながらも我國の宣傳も開始せられた。特にこれ等の親日的な人々の中には、印度は日本非難を中止し、日本品ポイコットをやめなければならぬと、種々決議をなし、その決議文をガンジーやホール等の許へ送つたり、或は自ら勸説して印度人の蒙を啓いてくれる人もあつた。英國の嚴重な監視も

あるので、大々的には出来なかつたが、しかしそれでも之等の人々の活動はかなり効果的であつた。それにまた我皇軍の連戦連勝の嚴たる事實が、支那側のデマ宣傳をどんどん粉碎して、我國の眞意が印度人の間に次第に分つて來た。元來、印度人は事變前には頗る親日的であつたが、その理由に大體二つある。第一は印度人の考では日本と印度とは宗教上並に文化上全く姉妹關係にあると見てゐることである。即ち現在の印度教徒は佛教を印度教の一派であると考え、釋尊を印度教の神ビシユヌの第九番目の化身として尊崇してゐて、教理上に於ても儀式祭禮に於ても佛教と印度教とは密接不可分な關係にあるものと考へてゐる。従つて印度人は日本の佛教を見て印度教のやうに思ひ、日本も印度と同

じ宗教の國であると思つて、近親性を感じるのである。第二は日露戦争に於ける我國の大勝である。日露戦争は有色人種が白色人種に勝つことが出来るといふ實例を示したもので、日本が若し負けてゐたら恐らく亞細亞は白色人種に蹂躙されてしまつたであらう。そう考へると日本は亞細亞を支へてくれた大黒柱である。亞細亞を亞細亞人の亞細亞たらしめる唯一の強力な國は日本である。従つて我々は日本を支持し、この大黒柱を壞すやうなことがあつてはならぬかかる考方が本來の印度人の對日觀であつた。勿論現在でも親日的な人々はこの考を堅持して密かに日本の爲に盡力してゐるのである。しかし上に述べたやうな支那のデマ宣傳と英國の政策によつて大半の印度人は著るしく反日的にな

つて行つた。しかし又反面、本來親日的であつた印度人であつたから、日本の印度に對する宣傳が少し活潑に迅速に行はれてゐるならば、かかる事態にたち至らなかつたかもしれぬ。かかる考方が本來の印度人の親日的傾向を助成して來たのである。勿論、現在でも親日的な人々はこの考を堅持して英國の眼を恐れながらも、ひそかに日本の爲に盡力してゐるのであるが、大半の印度人は上に述べたやうな支那のデマ宣傳と英國の政策によつて反日的になつて行つた。そこで考へられることは、若しも我國が支那に先手を打つて我國の眞意を印度に傳へてゐたら、かかる憂慮すべき状態にならなかつたであらうといふことである。事實、親日的な人

々は、「日本が歐米諸國に事變の真相を闡明し、理解を求める爲に國民使節を派遣したやうに、印度に對しても國民使節を送つてくれたら、常に英國の壓制下に呻吟してゐる我國民は、たへず親しみ尊敬してゐる亞細亞の大黒柱日本が奴隸的な印度を獨立國同様に認めて使節を送つてくれたことを心から感謝し、たゞそれだけのことで何の説明を聞かなくても直ちに日本の立場を理解し、輿論も親日的傾向を一層強めたことであらう」と語つてゐる。

若し日本がいち早く戰爭の原因を印度人に知らしてゐたならば、事變後の排日的風潮は決して生れなかつたであらうことは、この言葉からも察せられる。我々は印度人の認識不足を責むる前に我國自身を責めなければならぬ。印度

人は日露戰爭以後の日本に對する知識を求めよとあせつてゐた。しかし我國民は今迄餘りにも印度に對する文化宣傳に無頓着すぎて、殆んど效果的な活動をしてゐない。對日惡化の原因が遠くここにあることに想到すると慄然たるものがある。

### 排日より親日へ

しかし、時日が経ち、我皇軍の戦果赫々たるものがある今日では、次第に對日觀は訂正されつつある。即ち事變後、渡日して親しく日本の實狀を見聞した印度人は、今さら日本の強大なことに驚き、支那側の宣傳が全くデマであつたことを知り、歸印後、その見聞を傳へて印度人の對日觀を訂正し始めたのである。しかも本來

親日的な印度人であるから、口には日本を非難してゐても、内心では日本軍の強さに痛快を感じてゐた印度人もあつたのである。従つて、かかる報告は強く一部の印度人の胸をうち、特に

今事變の目的が蔣介石政權をあやつる歐米勢力の排除にあることを知つては、從來の排日觀が誤りであつたことをはつきり認識したのである。勿論印度人全般の對日觀が一朝一夕に改まるものとは考へられない。しかしかくの如くして我國の眞意が一部の印度人に理解せられて來たので、排日的傾向は次第に改まりつつある。

我國は目下東亞新秩序建設のため支那事變處理に邁進してゐる。しかし東亞新秩序建設は支那事變處理にのみ限定されたものではない。亞細亞を亞細亞人の亞細亞たらしめてこそ、東亞

新秩序は完成するのである。

そのためには亞細亞の隅々にまで、我國の眞意を傳へて、支那事變は東亞新秩序の建設のための戰であることをはつきり認識せしめなければならぬ。印度人に於ても我國の眞意をいち早く傳へなかつたために、今日の事態にたち至つたことを考へると、特にこの感が深い。

今や東洋の事態は蘭印、佛印の問題を繞つて頗る複雑化して來た。支那事變處理一本槍で進んで來た我國の外交は、有田外相の聲明にも見られる如く、大きく轉回せんとしてゐる。しかし外交の基調はあく迄、支那事變の處理にあり東亞新秩序の建設にあることは論を俟たない。即ちこれを中心にして廣く東亞安定圈を確立し東洋永遠の平和を維持することこそ現下の我國

の立場である。かかる際に、上に述べた印度の事變前後の事情は我國の今後の進路に一教訓を興へるものであらう。

### 内外情勢の緊迫に

## 畑陸相の訓話

注目すべき要旨

獨伊樞軸の著しい擡頭と英佛陣營の頹勢といふヨーロッパにおける新なる事態は否應なしに世界各国に多かれ少かれ影響を興へ、各國ともその外交政策を再検討するの必要に迫られつつある。モンロー主義を唱へる米國も國防擴充に躍起となつてスチムソン、ノックス兩氏を陸海

軍長官に夫々任命して政治體制の強化を企圖してゐる。殊に極東の情勢又容易ならざるものを多分に孕みつゝあるに顧みて對日牽制の必要を覺え最近屑鐵、工作機械の禁輸延期、太平洋艦隊の移動等漸次その動向を明瞭ならしめてゐるやうである。

日本としても勿論その影響を免るることは不可能であり、この歴史的な一大轉換期に處して誤りなからんことを念願しない者はゐない。然しながら坐して世界の變轉を眺めるは愚であつて國內のあらゆる體制の整備と共に歐米勢力の事變處理への介入は斷乎として許さざる方針を以て自主獨往の積極政策に進むべきは言までもないであらう。

歐洲問題不介入は單なる消極的なものでなく

我が國が自から求めて歐洲の事態に介入しないと同時に、歐米をして東亞の領域に介入を許さないといふ積極面を持つてゐるものである。國民の或者は歐洲の獨伊の勝利に批判力を失つてこの際獨伊樞軸の側に立ち歐米勢力の東洋よりの驅逐をなすべしと輕々に論ずる者があり又その反對を唱へる者がある。その他近衛公の新黨問題あり對國內諸勢力いよいよ多端を加へつつあるものの如くである。

かかる情勢のうちにあつて、豫て國內總力戰態勢の強化、その意味における國內政治體制の強化整備、またその線に沿つた新黨運動の推移に對して異常なる關心をもつてこれを凝視しつつある陸軍では去る六月廿五日午後四時陸軍省會議室に陸軍省全將校を集め畑陸相より極めて注

目すべき訓話を行つた。それは世界の變局に對處して好機を逸することなく事變處理を合理且つ有効に解決するためには徒らに腐儒の言議に墮し議論倒れとなつて千載一遇の機會を逃してはならぬこと、支那事變處理のため施策される各種政策の遂行に當り陸軍がその推進力たることを堅持すべきこと、特に新黨問題に言及し舉國一致の新政治體制の實現を希求しこれが順調なる進展を期する軍の態度を明瞭ならしめたこと、以上の三點が訓話の中核ともいふべき要點でこれが實踐のため軍に上下一貫鐵石の團結を要望し舉國一致の主張に間隙の生ずることを嚴に戒め軍紀の振肅を翹望したことは時局柄頗る注目される。この大要を述べれば次の如くである。

## 訓話要旨

一、世界情勢の變轉極りなき現況に對處して軍の檢討すべき事項も亦多岐多汎であるが諸子の常に忘れてならないことは「支那事變の合理且つ有效なる解決と國內戰時體制の刷新強化」とである。諸子は常に之を念頭におき世界の情勢を達觀し適正なる方途を探索しなければならぬ。

二、現下の國際情勢は帝國の國策完遂上有利に展開しつつあつてこの好機を無爲にして逸せざることは勿論、わが公正なる主張を理解せず國策の遂行を妨害する第三國に對しては斷乎たる處置に出ねばならぬことは言ふまでもない。徒らに腐儒の言議に墮して千載一遇の好機を失ふ

の譏を受けてはならぬ。しかしながら皇國の一舉手一投足は常に皇道の大精神に基くものであつて正義に反して權道に走るが如きは嚴に戒しむべきである。

三、事變處理の現段階において之が解決のため軍が各種政策遂行上の推進力たることは否むべからざる事實である。軍はこの重責に鑑み鐵石の團結を固め上下一貫左右一致の主張において寸分の罅隙があつてはならぬ。

四、國內體制の強化は本職着任以來の念願にして機會ある毎にこれが實現を要望したところであつて、眞の舉國一致の體制の生れることは最も望ましいことである。近時國內政治體制の強化を目的とする新黨運動その他各種の運動のあつては衆知の通りである。而もこの間軍の

抱懷する意向を知らんとする向きが少くないやうであるが萬一にも軍の眞意が誤り傳へられることがあつては思はざる結果を招來し國內體制強化の順調なる進展を阻害するやうなことになるぬとも限らないのであるから、諸子はその言行に深甚の注意を要するのである。

五、各局課の業務は事變の進展と國際情勢の急轉とに伴ひいよいよ複雑多岐となり炎熱の候諸子の勞苦も亦大なるものがあるのであるがこの上とも軍紀を振肅し志氣を振作し上下左右緊密なる連繫の下に任務の完遂に努力されることを望む。

## 防空施設

日支何れが

傑れてゐるか？

我國は反省せよ

## 支那の施設

支那に於ては防空施設は非常に遅れてをるかに見られてゐた。しかしながら、事變前における防空に関する著書などの多かつたのは實に驚くべき程であつたので、日本なんかの數十倍も出てをつたのである。一方上海あたりの建築規則の中には新に建築する場合必ず防護室を設けること、又各部屋をしきる壁には耐火装置をすること、及び其他防毒設備に關すること等の規



定が、既に事變前三年位前の規則に出てをる。これは支那一般家屋が日本家屋より防空に對しては強力である上に、既に蔣介石はこの事變前にかういふことを計畫してをつたらしいのである。それからもう一つは、どうせ日本と戦争をすれば交通機關が爆撃されるに違ひないといふことから各驛には必ず地下防空室を設けてをつたといふことである。これを以てみると、中部支那の防空施設は相當に完備されてをつたと見られるのである。或は又、昭和十二年八月の浙江省の防空監視哨の報告によると、日本の飛行機が何臺、支那の飛行機が何臺來た。また爆弾投下何回といふやうなことが詳細に記されてゐる。従つてかういふ防空の施設なり、行動を見るとき、今日の日本の防空訓練よりは進んでをつ

たのではないかと思はれるが、殊に防空壕なんかの設備はよほど進歩してをつたやうである。

### 我國の防空

ひるがへつて、日本の防空を見るのに、我が國では防空演習といふことが行はれて來てゐるが、しかし、まだ防空資材なども十分でなく、且つ、支那其の他の諸國と違つて耐火的構造の建物ではないので、従つて焼夷弾など投下されると前の大震災火災のやうな悲惨な状況に陥るといふことから、地下防空壕を中心としてのその受持箇所を待避することを認めざるを得ないやうになつてゐる。かういふ點から見ると、まだ防空壕なども十分ではなく、同時に瓦斯マスクなども不十分であり、要するに、今日のやうな

状態で一度他から空襲せられた場合に、果してよいかどうかといふと、甚だ疑問であり、もう少し突込んで資材も充實をはかり、又訓練も徹底を期して、一朝有事の際の心構へを鍊り、最悪の事態に處しても、之を乗り越えるだけの準備、教養を充實して行かねばならぬのではないかと考へる。

### 布哇在留支那人の

### 勢力と活動

最近の調査によればハワイ在留の支那人数は約二萬八千に及んでゐる。十五萬の日本人數にくらべると、一人と五人の割合で、數に於てははるかに壓倒されてゐるが、經濟、行政の兩方

面に於てはずつと強固な力を有してゐる。

元來支那人は商才にたけて、世界各國に於ける華僑の勢力は侮るべからざるものがあるが、ハワイに於ても多數の日本人を尻目に政治、經濟に於て強大な力を把持してゐる。即ちハワイ島内の商業取引の大部分はこれ等支那商人の手を通じて行はれ、アメリカ市民權を有する支那人はその總數の八十五パーセントを占めてゐるしかも彼等の殆んど多數が數十年前、砂糖栽培に従事するために渡布した移民の子孫であることを考へると、支那人の底力の強さに驚かざるを得ない。昨年九月六日、七日の兩日にはホルルに於て、支那人渡布百五十周年記念祭が行はれた。

# 編輯後記

▽歐洲戦争は驚歎すべき迅速さで戦局を轉回して行つた。豫測を裏切られた國々が如何に多いことか世紀の驚異である。

▽支那事變處理に邁進してゐる我國は、歐洲戦争に不介入の方針を堅持してゐるが、佛印、蘭印をめぐつて、歐洲戦争の餘波はひたひたと我國にもおしよせて來た。

▽獨伊側か英佛側か、今や我國はこの問題にまともによつつかつた観がある。然し我國には独自の立場がなければならぬ。本文はこの問題に對する示唆深き快論である。熟讀をお薦めする。

## 本會役員

- |      |              |
|------|--------------|
| 會長   | 法學博士男爵 阪谷芳郎  |
| 理事   | 東大教授男爵 穂積重遠  |
| 常務理事 | 小松謙助         |
| 理事   | 社會局長 新居善太郎   |
| 理事   | 實業學務局長 關口勳   |
| 理事   | 東京朝日主筆 緒方竹虎  |
| 理事   | 日清製粉社長 正川貞一郎 |
| 理事   | 大阪毎日會長 高石眞五郎 |
| 理事   | 帝教專務理事 武部欽一  |
| 理事   | 社會教育局長 田中重之  |
| 理事   | 普通學務局長 中野善教  |
| 理事   | 農學博士 那須皓     |
| 理事   | 伯 爵 二荒芳徳     |
| 理事   | 理學博士 藤原咲平    |
| 理事   | 衆議院議員 牧野良三   |
| 理事   | 三菱社常務 三好重道   |
| 理事   | 女青團理事長 吉岡彌生  |
| 理事   | 三井糧食會 米山梅吉   |
| 理事   | 第一銀行頭取 明石照男  |
| 理事   | 貴族院議員 岩田宙造   |

教育パンフレット(第三八一輯)  
 毎月三回(一日・十日・二十日發行)  
 定價一冊金十錢(送料共)  
 年額金三圓(送料共)

昭和十五年七月五日印刷  
 昭和十五年七月十日發行

東京市小石川區白山御殿町百二十七番地  
 財團法人社會教育協會内  
 編輯兼發行人 荒木昇

東京市牛込區櫻町七番地  
 印刷所 大日本印刷株式會社  
 櫻町工場

發行所 東京市小石川區白山御殿町  
 百二十七番地  
 財團法人 社會教育協會  
 振替東京二一八三番  
 電話小石川(85)八五八番  
 八五九番

終

